長春閣鑒賞

第三集

長春閣鑒賞

第三集

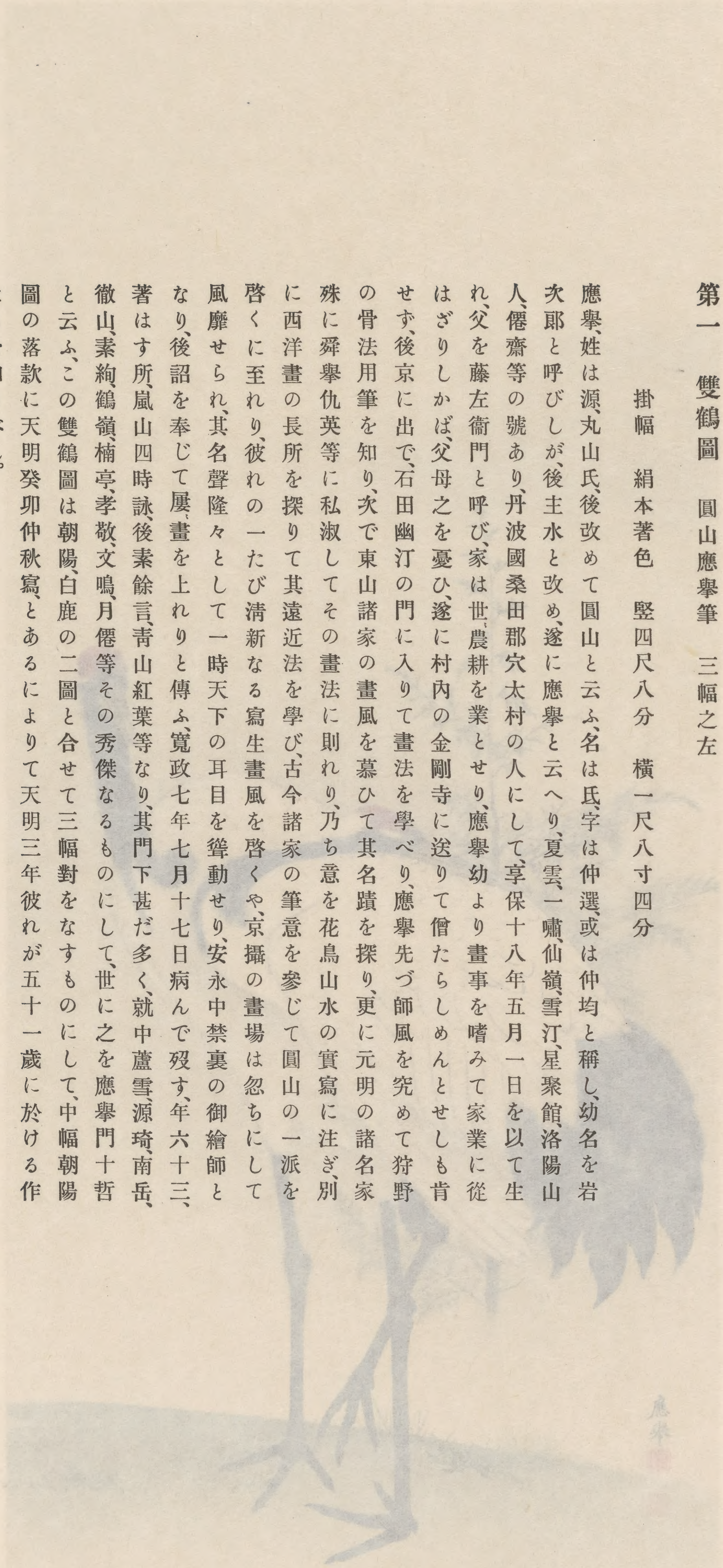
長春閣鑑賞第三集目次

第二十七　高士清樂圖屏風　圓山應擧筆　一隻
第二十八　老松白鷺圖　圓山應擧筆
第二十九　猛虎圖　圓山應擧筆
第　三　十　雪中老松圖　圓山應擧筆
第三十一　想思鳥圖　圓山應擧筆
第三十二　唐美人圖　圓山應擧筆
第三十三　清流香魚圖襖　圓山應擧筆
第三十四　雞圖　圓山應擧筆
第三十五　懸崕猛虎圖　圓山應擧筆
第三十六　呂洞賓圖　圓山應擧筆
第三十七　墨梅圖　圓山應擧筆
第三十八　雪景山水圖　圓山應擧筆　雙幅之左
第三十九　雪景山水圖　圓山應擧筆　雙幅之右
第　四　十　福祿壽圖　圓山應擧筆

第四十一　巖頭水禽圖　圓山應擧筆
第四十二　雪中南天圖襖　傳源琦筆
第四十三　花鳥圖屏風　長澤蘆雪筆　一雙
第四十四　月下杜鵑圖　長澤蘆雪筆
第四十五　常盤圖　山口素絢筆
第四十六　摘菜圖　渡邊南岳筆
第四十七　官女圖　渡邊南岳筆
第四十八　杜鵑圖　森狙仙筆
第四十九　出山釋迦圖　吳春筆
第　五　十　海濱仙鶴圖屏風　松村景文筆　一雙之一
第五十一　海濱仙鶴圖屏風　松村景文筆　一雙之一
第五十二　水川骨白鷺、雪松泛鴨圖　松村景文筆　雙幅

第一　雙鶴圖　圓山應擧筆　三幅之左

掛幅　絹本著色　竪四尺八分　横一尺八寸四分



應擧、姓は源、丸山氏、後改めて圓山と云ふ、名は氏字は仲選、或は仲均と稱し、幼名を岩次郎と呼びしが、後主水と改め、遂に應擧と云へり、夏雲、一嘯、仙嶺、雪汀、星聚館、洛陽山人、僊齋等の號あり、丹波國桑田郡穴太村の人にして、享保十八年五月一日を以て生れ、父を藤左衛門と呼び、家は世〻農耕を業とせり、應擧幼より畫事を嗜みて家業に從はざりしかば、父母之を憂ひ、遂に村内の金剛寺に送りて僧たらしめんとせしも肯せず、後京に出で、石田幽汀の門に入りて畫法を學べり、應擧先づ師風を究めて狩野の骨法用筆を知り、次で東山諸家の畫風を慕ひて其名蹟を探り、更に元明の諸名家殊に舜擧仇英等に私淑してその畫法に則れり、乃ち意を花鳥山水の實寫に注ぎ、別に西洋畫の長所を採りて其遠近法を學び、古今諸家の筆意を參じて圓山の一派を啓くに至れり、彼れの一たび淸新なる寫生畫風を啓くや、京攝の畫場は忽ちにして風靡せられ、其名聲隆々として一時天下の耳目を聳動せり、安永中禁裏の御繪師となり、後詔を奉じて屢〻畫を上れりと傳ふ、寛政七年七月十七日病んで歿す、年六十三、著はす所、嵐山四時詠、後素餘言、靑山紅葉等なり、其門下甚だ多く、就中蘆雪、源琦、南岳、徹山、素絢、鶴嶺、楠亭、孝敬、文鳴、月僊等その秀傑なるものにして、世に之を應擧門十哲と云ふ、この雙鶴圖は朝陽、白鹿の二圖と合せて三幅對をなすものにして、中幅朝陽圖の落款に天明癸卯仲秋寫、とあるによりて天明三年彼れが五十一歳に於ける作たるを知るべし。

第二十七　高士清閑圖　[illegible]
第二十八　老松白鶴圖　[illegible]
第二十九　猛虎圖　[illegible]　一雙
第三十　雪中老松圖　[illegible]
第三十一　想思鳥圖　圓山應擧筆
第三十二　唐美人圖　[illegible]
第三十三　清流香魚圖　[illegible]
第三十四　雛圖　[illegible]
第三十五　懸瀑猛虎圖　圓山應擧筆
第三十六　呂洞賓圖　[illegible]
第三十七　墨梅圖　[illegible]
第三十八　雪景山水圖　圓山應擧筆　雙幅之左
第三十九　雪景山水圖　圓山應擧筆　雙幅之右
第四十　福禄壽圖　圓山應擧筆


應擧

第二　朝陽圖　圓山應擧筆　三幅之中

掛幅　絹本著色　竪四尺八分　横一尺八寸四分


天明癸卯仲秋寫
應擧

第三　白鹿圖　圓山應擧筆　三幅之右

掛幅　絹本著色　竪四尺八分　横一尺八寸四分



第四　海邊老松圖　圓山應擧筆

襖　紙本水墨　竪五尺九寸八分　横一丈八尺五寸六分

應擧は寺社の障壁に筆を揮ふ甚だ多く、殊にその著明なるものとしては近江國圓滿院、但馬國大乘寺、丹波國金剛寺、讃岐國琴平神社別當金光院、尾張國明眼院等に畫きしものを推すべし、此襖畫は以下十圖と共に京洛南禪寺塔中歸雲院の舊藏にして、是れまた應擧が同院の障壁に筆を揮ひしものなり、今その中の九圖は美術館の壁障に用ひたり、卽ち其廣間には此圖の外第五、第六の海邊老松圖の襖を見るべく、また上間の襖には第七圖及び第八圖中の一なる月夜圖あり、三間には第八圖に於ける一半及び第九の江岸楊柳圖襖幷びに第十の同圖壁張あり、また第十一圖の仙客を畫ける冬景圖は同館樓上に於ける襖なりとす、第十二第十三の兩圖は今別に藏するも、廣間に於ける圖と同意匠にして、恐らくもとそれ等と接續せしものなるべし、その製作年代に就ては第十一圖の落款に、天明丁未暮春寫とあるを見るのみ、丁未は卽ち天明七年にして、彼れの齡正に五十五の時に該當す、此年は殊に彼れが寺社の障壁に筆を染めたる歲にして、此夏に於て琴平神社別當金光院の鶴間、虎間の襖に畫き、冬に於て大乘寺の山水間、芭蕉間に畫けり、想ふに舊歸雲院の是等の諸圖が悉く此年の作なりや否やは遽かに斷じ難しと雖も、其作風より察するも此前後の作たることは蓋し否定すべからざるべし。



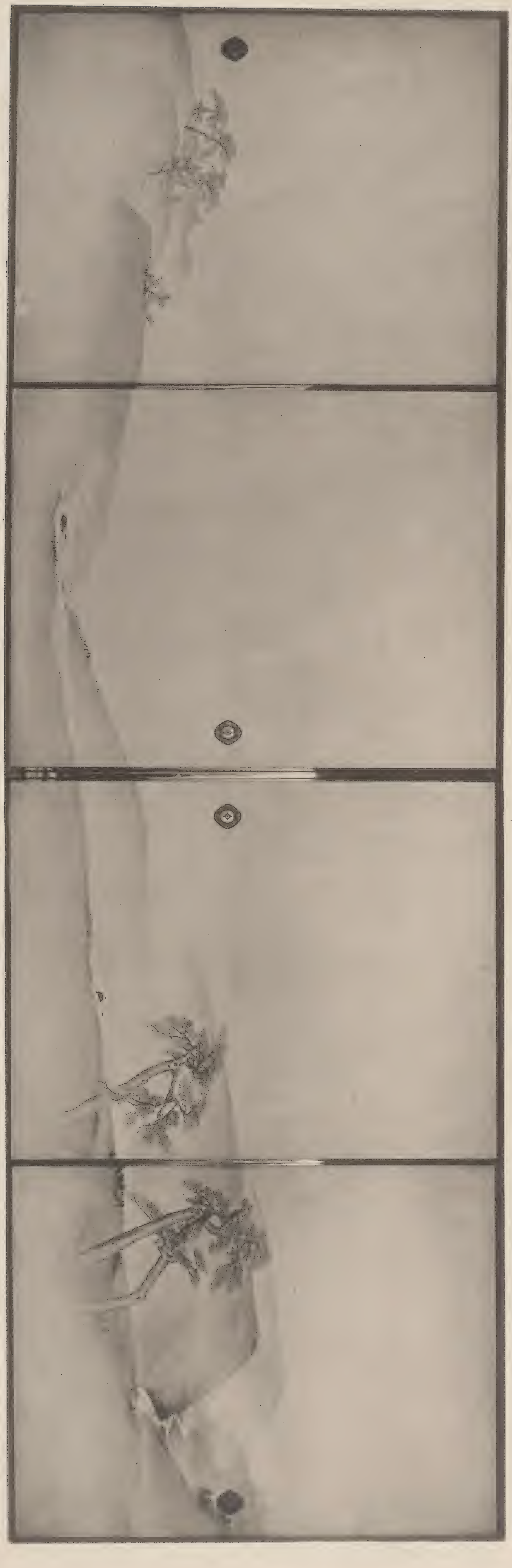
第五　海邊老松圖　圓山應擧筆

襖　紙本水墨　竪五尺九寸八分　横一丈八尺五寸六分



第六　海邊老松圖　圓山應擧筆

襖　紙本水墨　竪五尺九寸八分　横一丈八尺五寸六分



第七　月夜泛舟圖　圓山應擧筆

襖　紙本水墨　竪五尺九寸八分　横一丈八尺五寸六分



第八　江頭月夜圖　圓山應擧筆

襖　紙本水墨　竪五尺九寸八分　横一丈四尺

江岸楊柳圖　圓山應擧筆

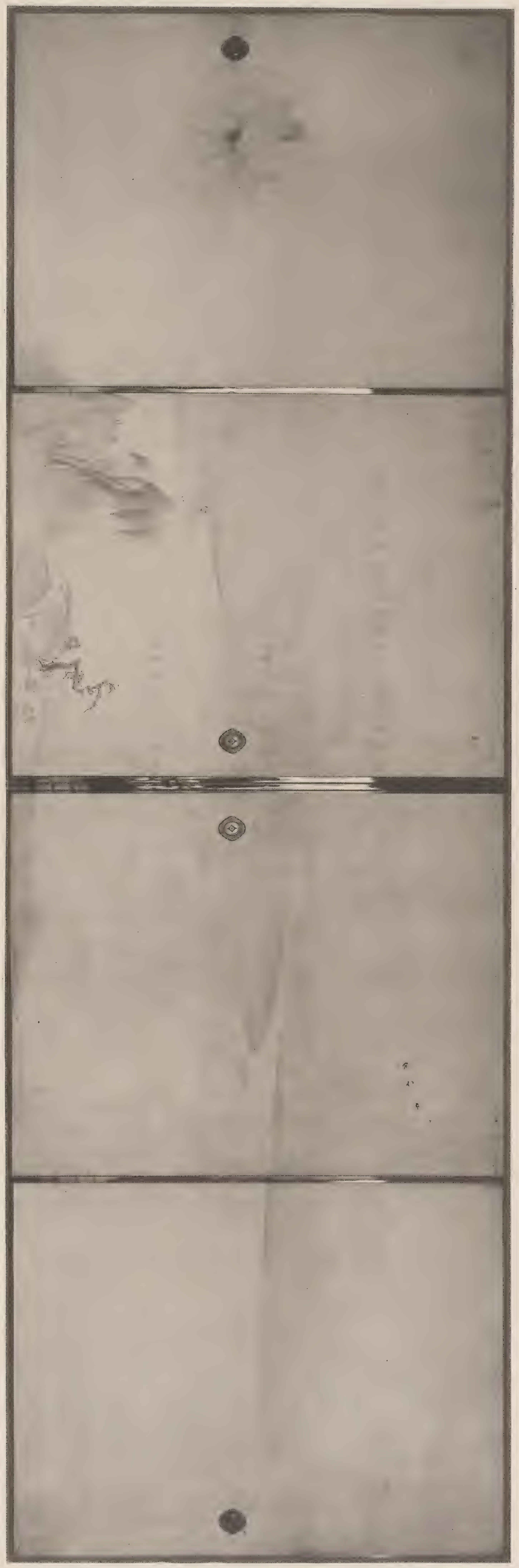
襖　紙本水墨　竪五尺九寸八分　横一丈四尺





第九　江岸楊柳圖　圓山應擧筆

襖　紙本水墨　竪五尺九寸八分　横四尺六寸四分



第十　江岸楊柳圖　圓山應擧筆

壁張　紙本水墨　竪六尺一寸七分　橫一丈七尺八寸二分



第十一　雪景山水圖　圓山應擧筆

襖　紙本水墨金泥　竪五尺六寸五分　横一丈四尺



第十二　海邊老松圖　圓山應擧筆

襖　紙本水墨　竪五尺五寸八分　横一丈二尺二寸三分



第十三　海邊老松圖　圓山應擧筆

襖　紙本水墨　竪五尺五寸八分　横一丈二尺二寸三分



第十四　雪景山水圖　圓山應擧筆

掛幅　紙本淡彩　竪四尺八寸　横二尺八寸四分



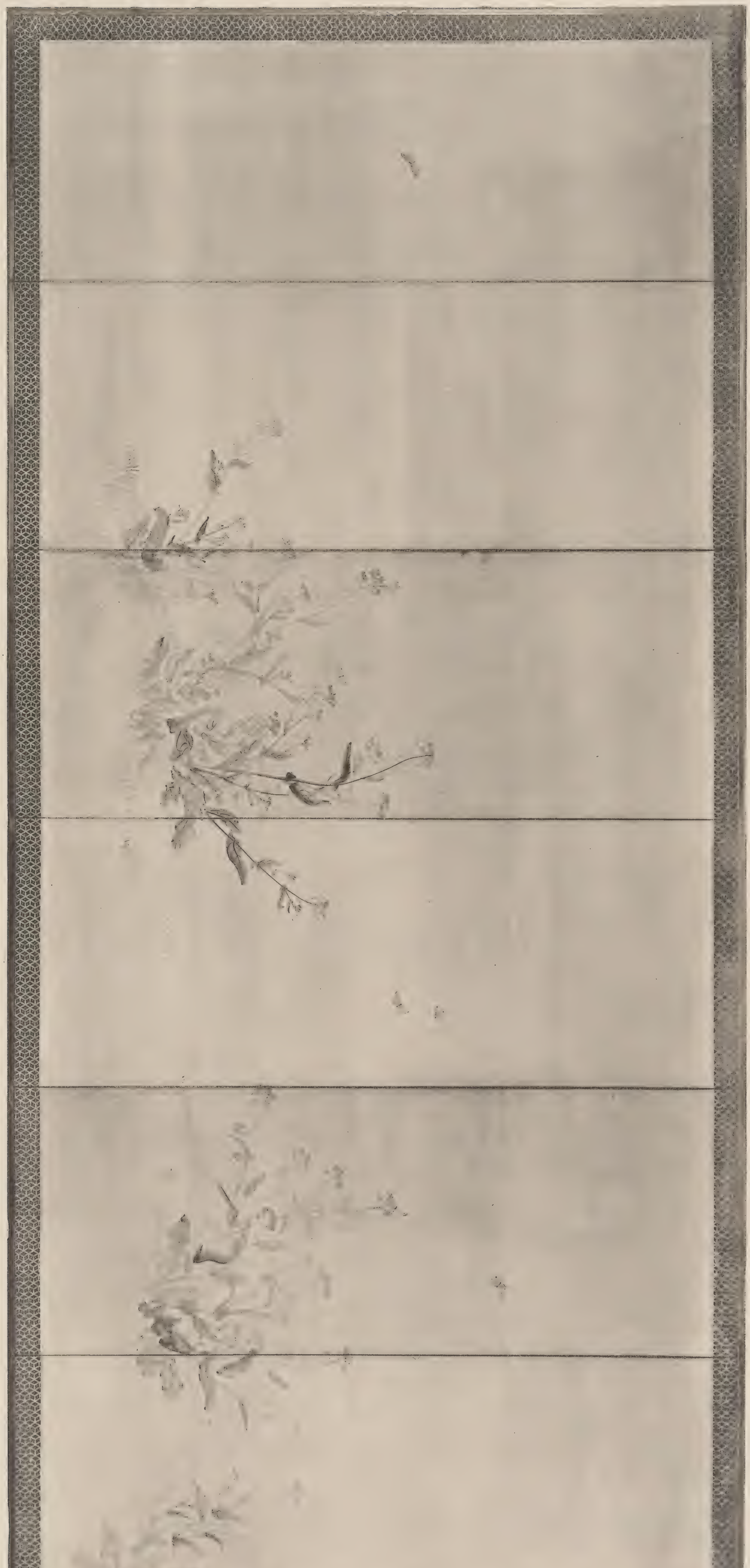
第十五　雪景山水圖　圓山應擧筆

掛幅　紙本水墨金泥　竪五尺九寸七分　横七尺四寸六分



第十六　榮花圖　圓山應擧筆　一雙之一

屏風　紙本淡彩　竪五尺一寸二分　横一丈一尺九寸



第十七　霜葉圖　圓山應擧筆　一雙之一

屏風　紙本淡彩　竪五尺一寸二分　橫一丈一尺九寸



第十八　大原女圖　圓山應擧筆

掛幅　絹本淡彩　竪三尺六寸六分　横一尺二寸八分


安永四乙未歳十二月寫
應擧

第十九　清瀧圖　圓山應擧筆

掛幅　紙本水墨　竪四尺五寸四分　横九寸五分


清瀧
應擧

第二十　雛子圖　圓山應擧筆

掛幅　紙本淡彩　竪三尺二寸九分　横九寸四分


安永丁酉仲夏寫
應擧

第二十一　寒山拾得圖　圓山應擧筆

掛幅　紙本水墨　竪二尺九寸八分　横四尺六寸

第二十一　東山倶樂部　岡山[illegible]

[illegible]



第二十二　山水圖　圓山應擧筆　一雙之一

雛屏風　紙本金地著色　竪一尺四寸九分　橫五尺五寸五分

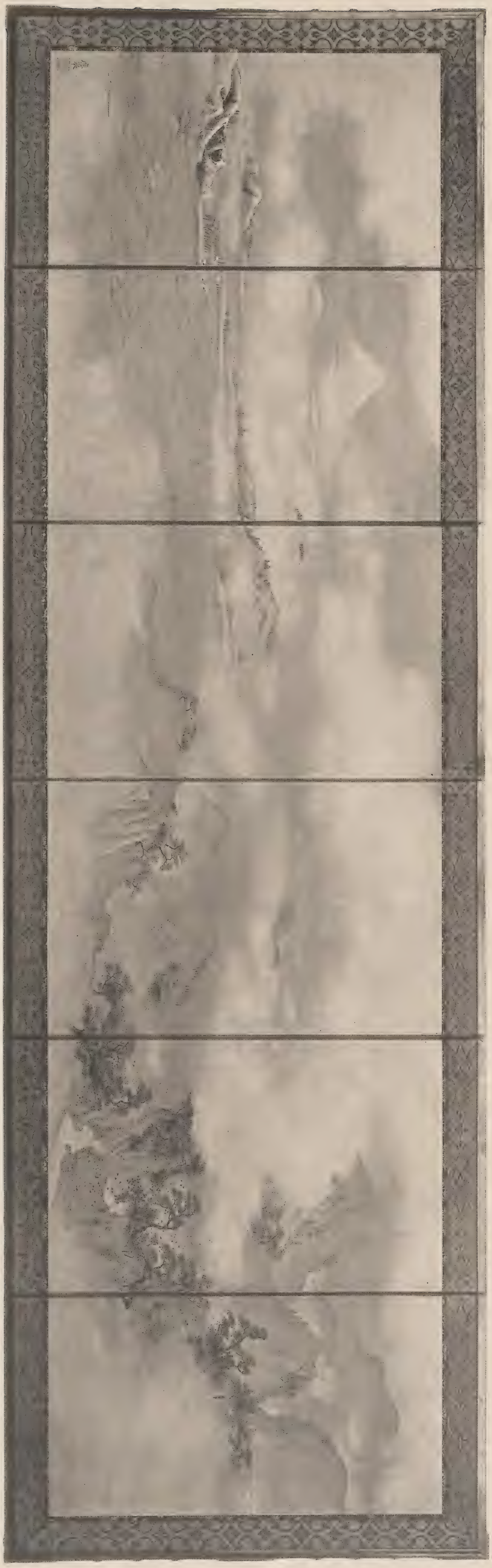
第二十二　山水圖　狩野養信筆　一幀

紙本淡彩　絹本著色　縦一尺四寸八分　横二尺八寸三分



第二十三　山水圖　圓山應擧筆　一雙之一

雛屏風　紙本金地著色　竪一尺四寸九分　横五尺五寸五分



第二十四　牡丹雛子圖　圓山應擧筆

掛幅　絹本著色　竪三尺七寸六分　横一尺五寸一分



第二十五　猛虎圖　圓山應擧筆

掛幅　絹本著色　竪三尺二寸　横四尺六寸六分



第二十六　馬皇后圖　圓山應擧筆

掛幅　絹本著色　竪三尺八寸八分　横一尺七寸九分

是は應擧が天明二年、卽ち其五十歳に於ける時の作なり、圖の上部には自ら德冠後宮の四字を題す、是れによりて其馬皇后を圖せるものなるを知る、馬皇后は漢の明帝の皇后にして、年十三にして選ばれて太子宮に入り、陰后に奉承す、禮讓ありて上下同列に敬慕せられしが、顯宗位に卽くに及びて后を以て貴人となす、時に賈貴人亦入りて肅宗を生みしに、后之を取りて愛育到らざるなし、永平三年春皇后を立てんとする議あり、陰太后曰はく、馬貴人の德、後宮に冠たり、卽ち其人なりと、遂に入りて皇后となる、淑德殊に高く、帝の寵敬日に隆なり、帝崩じて肅宗立つに及びて尊んで皇太后となす、建初四年六月病んで崩ず、年四十餘、諡して明德皇后と云へり。


德冠後宮
天明壬寅初夏寫
平安 應擧

第二十七　高士清樂圖　圓山應擧筆　一隻

風爐先屏風　絹本著色　竪七寸九分　横四尺七寸八分



第二十八　老松白鷺圖　圓山應擧筆

掛幅　絹本淡彩　竪三尺四寸七分　横一尺三寸


天明甲辰季夏寫
應擧

第二十九　猛虎圖　圓山應擧筆

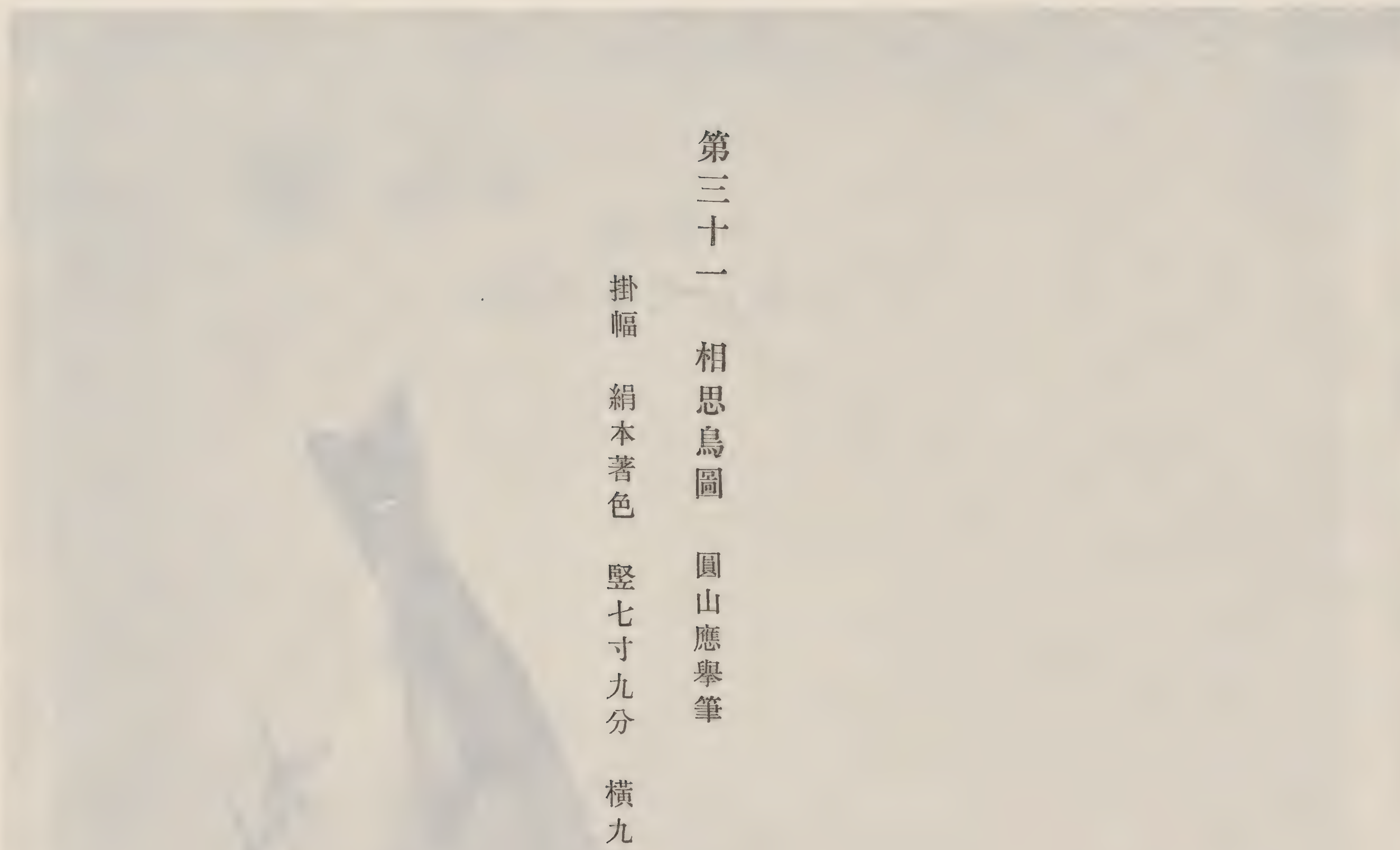
掛幅　紙本淡彩　竪四尺二寸二分　横一尺八寸八分


乙巳季秋寫
應擧

第三十　雪中老松圖　圓山應擧筆

掛幅　絹本淡彩　竪三尺九寸三分　横一尺三寸六分


天明丙午仲冬寫
平安
應擧



第三十一　相思鳥圖　圓山應擧筆

掛幅　絹本著色　竪七寸九分　横九寸五分


天明丁未仲春寫
平安
應擧

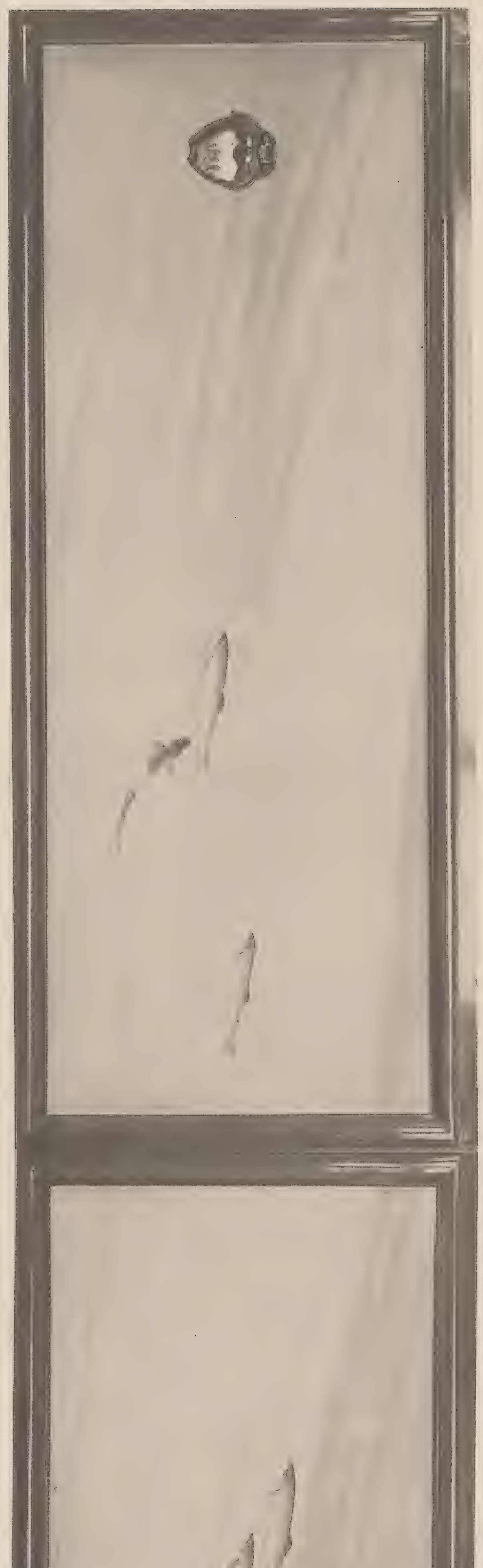
第三十二　唐美人圖　圓山應擧筆

掛幅　絹本著色　竪四尺一寸一分　横一尺六寸八分



第三十三　清流香魚圖　圓山應擧筆

襖　絹本著色　竪八寸　横四尺五寸



第三十四　雞圖　圓山應擧筆

掛幅　紙本著色　竪三尺二寸四分　横九寸五分


天明丁未仲秋寫
應擧

第三十五　懸崕猛虎圖　圓山應擧筆

掛幅　紙本淡彩　竪四尺一寸二分　横一尺六寸五分

卷頭　紙本著色　竪四尺一寸二分　横一尺八寸五分

圖三十五　蹴鞠蹴鞠圖　岡山藩舊藏


天明丁未仲秋寫
應擧

第三十六　呂洞賓圖　圓山應擧筆

掛幅　絹本淡彩　竪三尺六寸九分　橫一尺六寸六分

この畫の天明七年仲秋の作なる事は、其落款によりて明かにするを得べし、時に應擧は五十五歲にして、技法の正に圓熟の境に入りし時なり、圖は呂洞賓にして、呂氏は唐の道士なり、名を巖と云ひ、字は洞賓、蒲州永樂縣の人にして、其祖の渭は禮部侍郎となり、父の讓は海州の刺吏たり、貞元十四年四月十四日の已の時に生れたるに因りて、純陽子と號せり、少にして聰敏、曾て廬山に遊び、火龍眞人に遇ひて天遁劍法を傳へ、また雲房先生に從ひて鶴嶺に至り、上眞秘訣を得たりと云ふ。

[illegible]愛の[illegible]天保十四年四月十四日の[illegible]

[illegible]

箱書　青木周弼　[illegible]

第三十六　呂洞賓圖　岡山[illegible]


天明丁未仲秋寫
平安
應擧

第三十七　墨梅圖　圓山應擧筆

掛幅　紙本水墨　竪一尺九寸五分　横三尺四寸二分



第三十八　雪景山水圖　圓山應擧筆　雙幅之一

掛幅　絹本淡彩　竪三尺八寸一分　横一尺九寸一分

掛幅　紙本墨畫　竪三尺八寸一分　横一尺九寸一分

第三十八　雲煙山水圖　岡山雪舟筆　雙幅之一



第三十九　雪景山水圖　圓山應擧筆　雙幅之一

掛幅　絹本淡彩　竪三尺八寸一分　横一尺九寸一分


天明戊申
平安源應擧

第四十　福祿壽圖　圓山應擧筆

掛幅　絹本著色　竪三尺四寸八分　横一尺四寸


寛政己酉初冬寫
平安源應擧

第四十一　巖頭水禽圖　圓山應擧筆

掛幅　絹本著色　竪三尺七寸四分　横一尺八寸五分

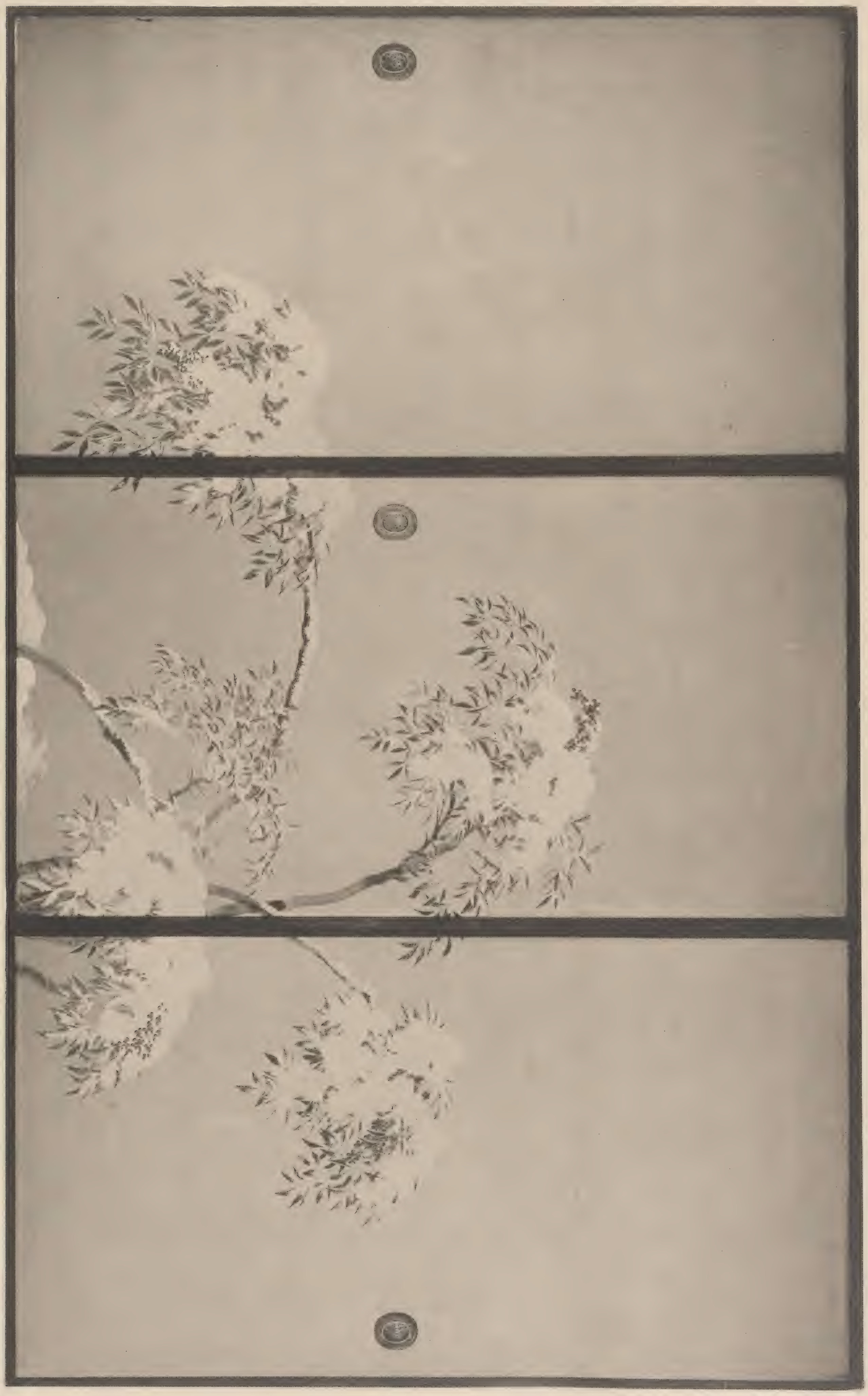
應擧は花卉翎毛の寫生に於て屢、其手腕を發揮せしが、是れまた江岸に水禽を描寫せるものなり、其落款には寛政癸丑初夏寫源應擧とあり、寛政癸丑は卽ち寛政五年にして彼れが筆を但馬國大乘寺の竹間襖に染めたる年なり、時に彼れ六十一歲にして其歿年に先つ二年、知るべし、此畫實に彼れの晚期の作たるを、圖上に一首の和歌を書す、曰はく吉野爾有、夏實之河乃、川余杼爾、鴨曾鳴成、山影爾之氐と、此短歌は萬葉集第三卷に收むる所にして、湯原王が芳野を詠じ給へるものなり、其書は有栖川宮七世、織仁親王の御筆なりと云ふ。



第四十二　雪中南天圖　傳源琦筆

襖　金地紙本著色　竪五尺七寸　横三尺

是は長春閣南天間に於ける襖にして、金地に濃厚なる著色を以て、白雪を頂ける南天を圖せるものなり、源琦の筆と云ふ、源琦姓は源、氏を駒井と呼び、字は子韞、名は琦、故に源琦と稱す、俗稱を幸之助と云ひ、京師の人なり、應擧に從ひて畫法を討ね、深く師風を究めて別に一家の格を得たり、唐美人を畫くに長じ、また設色に巧みにして人物花鳥を畫くや、賦彩精麗、殆ど人目を眩せんとするものあり、彼れ常に師側に侍してその畫を助成し、其技愈〻熟し、遂に蘆雪と共に應擧門の雙璧と稱せらるゝに至れり、寛政九年八月八日歿す、年四十有八。



第四十三　花鳥圖　長澤蘆雪筆　一雙

屏風　紙本著色　各竪五尺八分　横八尺六寸

蘆雪は名を魚と云ひ、字は氷計、長澤を氏とす、山城國淀藩の士なり、應擧の門に入りて畫法を問ひしが、頗る才氣あり、早く師風を捉へ、別に新意を出だして一家の法を得たり、其爲人磊落にして不羈、其素行は畫く所と共に殆ど拘束すべからざるものあり、或は傳ふ彼れ應擧に破門せられたりと、其眞否明かならざるも、蓋し彼れの逬るが如き才氣は却りて師の厭ふところとなり、遂に是に至れるやも知るべからず、世に彼れと源琦とを併稱して應擧門の雙璧となすあり、而かも評家或は云ふ源琦は到底蘆雪の敵にあらずと、寛政元年禁裡造營の事あるや、彼れまた障壁に筆を染むるの榮を得たり、寛政十一年六月十八日歿す、年四十五、此四曲屏風一雙は彼れの畫く所にして、一は江岸の紅梅に水禽を圖し、他は水邊に鷺鷥を畫けるもの、彼れの作としては寧ろ穩健にして雅致あるものに屬すべし。





第四十四　月下杜鵑圖　長澤蘆雪筆

掛幅　絹本淡彩　竪三尺四寸五分　横一尺六寸



第四十五　常盤圖　山口素絢筆

掛幅　絹本著色　竪三尺六寸九分　横一尺五寸五分

素絢、山口氏、字を伯陵と云ひ、後に伯後と改む、通稱を武次郎と呼び、山齋の號あるも素絢を以て世に行はる、京師の人にして祇園袋町に住せり、早く應擧の門に遊びて畫法を究め、一家の格を得たり、世に應擧門十哲の一に數へらる、文政元年十月二十四日六十歳にして歿せり、彼れは殊に婦女を畫くに名あり、應擧の門流にして婦女の粧姿を寫すに名を得たるもの、源琦南岳の徒なきにあらざるも、邦俗の婦女を描きて彼れは特り纖秀の美を擅にすと稱せらる、此圖はかの常盤が雪中三兒を伴ひて敵人の追逼を免れんとする狀にして、彼れの得意とする題材なるが如く、賦色絢麗にして用筆の雋秀なる、彼れの盛名に愧ぢざるものあるに似たり。



第四十六　摘菜圖　渡邊南岳筆

掛幅　絹本著色　竪三尺八寸三分　横一尺三寸五分

南岳、渡邊氏、名は巖、字を維石と云ひ、京師の人なり、應擧に就きて畫法を學び、世に門下の十哲に數へらる、或は云ふ彼は源琦の門に出づと、後一家を成し、名聲大に揚れり、嘗て江戸に遊び、圓山の畫風を此地に流布せしめたり、大西椿年、谷文一、鈴木南嶺の徒は卽ち江戸に於ける其門流なり、文化十年正月四日、年四十七を以て卒す、彼れの畫事に於て尤も得意とする所は水中遊魚、邦俗婦女等を描くにありと云はる、此圖は一少婦の若菜を摘む狀にして、其圖上には橘千陰の讃及び自寛の藤原光俊朝臣の歌を書せるあり、千陰は加藤を氏とし、通稱又左衞門、また德與磨とも云ひ芳宜園と號し、別に逸樂齋、江翁、耳梨山人等の號あり、江戸の人にして、家は世ゝ與力たり、千陰は父枝直に就きて和歌を學び、又加茂眞淵に師事す、天明八年病を以て職を辭し專ら研學に力を致せり、畫また建部綾足に學びて之を能くす、文化五年九月二日歿す、年七十五、萬葉集略解、宇氣羅が花、行加飛婦里、香取日記を始めとして其著はす所甚だ多し、自寛は三島氏にして江戸の人、通稱吉兵衞、初め名は景雄、後薙髮して自寛と稱し、方壼、三樂庵等の別號あり、加茂眞淵の門下にして文化九年四月二十六日歿せり。



第四十七　官女圖　渡邊南岳筆

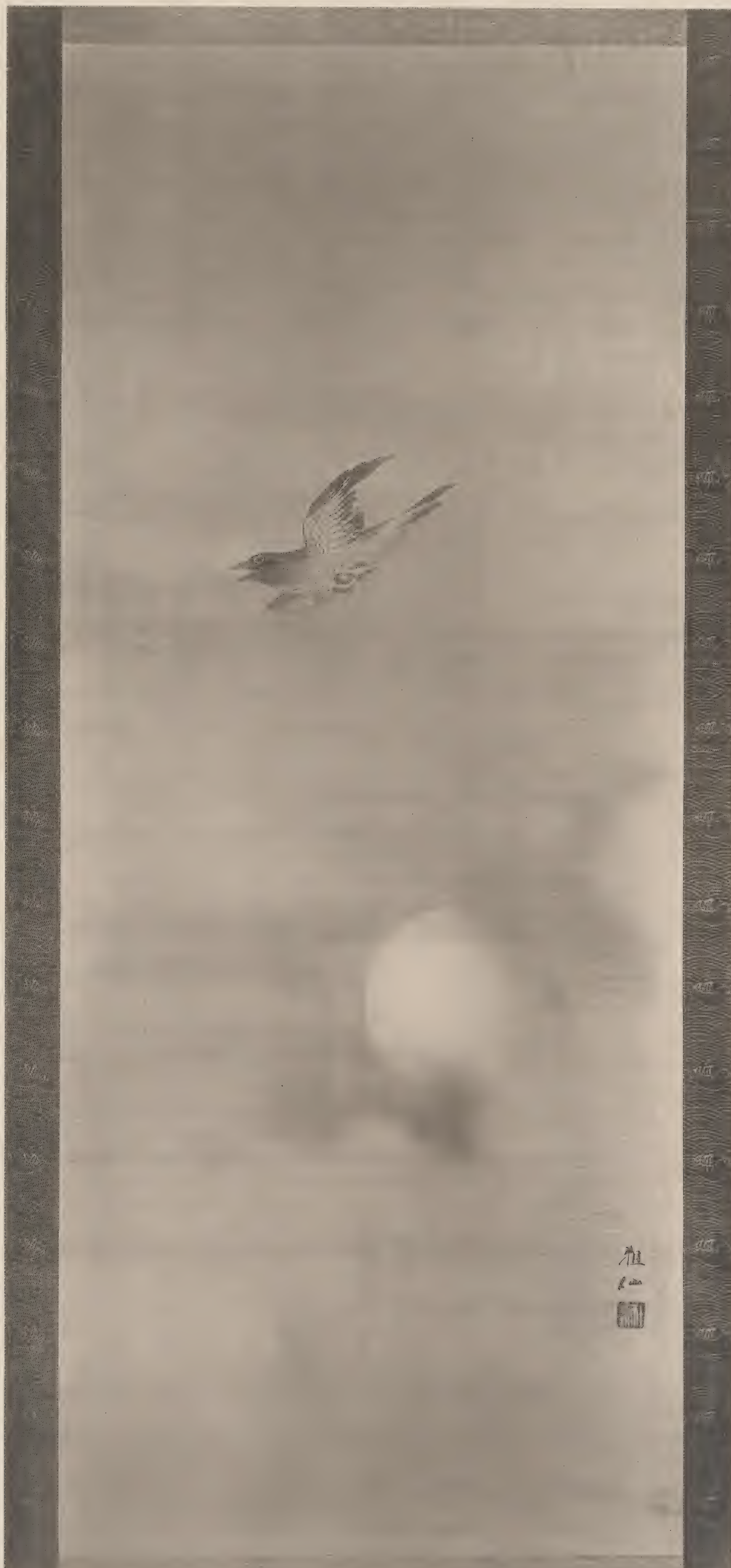
掛幅　絹本著色　竪三尺七寸　横一尺三寸二分



第四十八　杜鵑圖　森狙仙筆

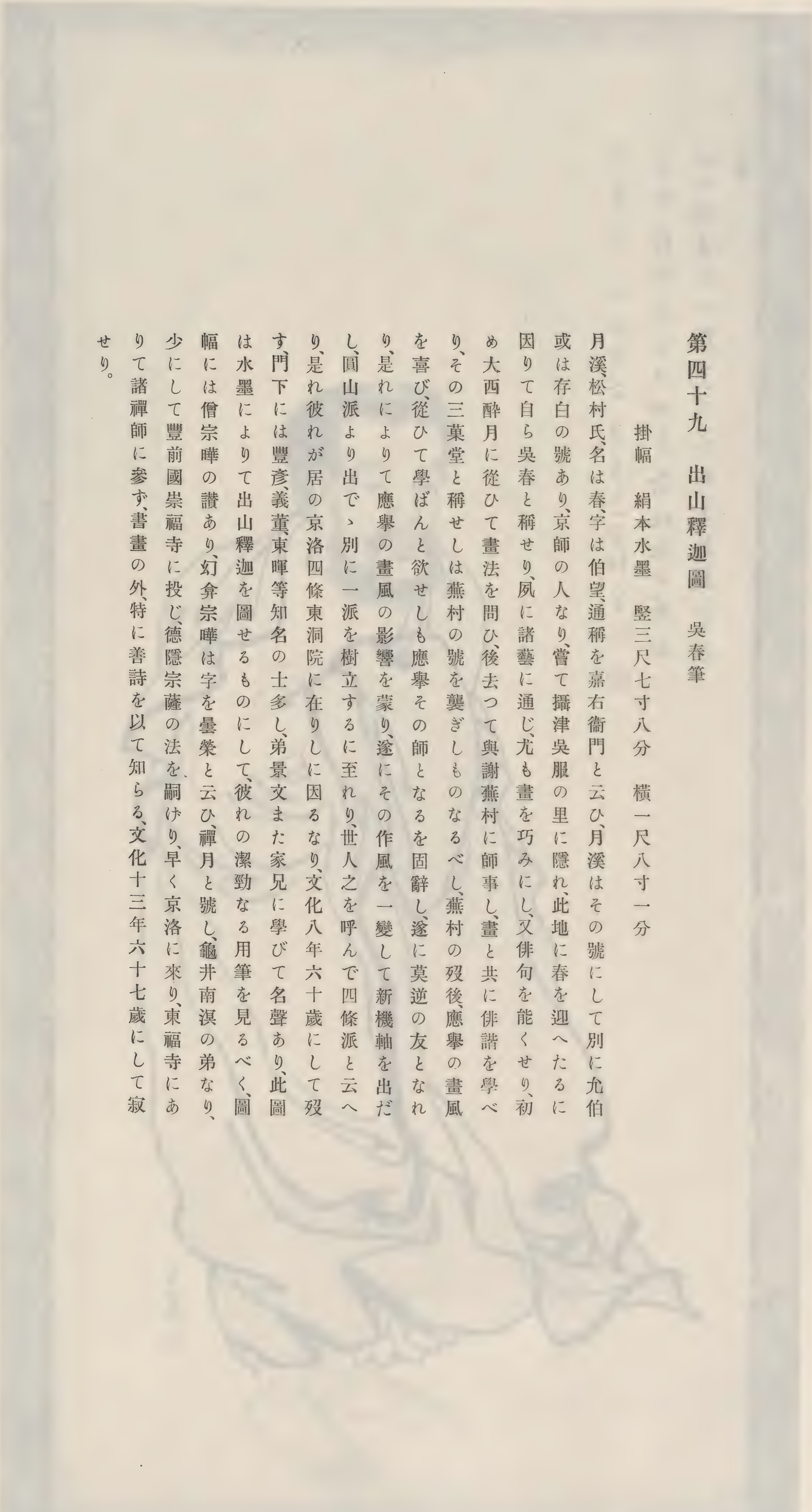
掛幅　絹本淡彩　竪三尺二寸三分　横一尺三寸四分

森狙仙、名は守象、字は叔牙、長崎の人にして大阪に住す、或は攝津の人なりとも稱す、畫を山本如春齋に學びて如寒齋と號し、別に靈猫庵と云ふ、されど祖仙を以て世に行はれ、後に改めて狙仙と呼べり、傳へて云ふ、彼れの崎陽に在るの日、一猨を得て之を庭樹に繫ぎ、其態を寫して來舶の清人に示す、清人之を見て人家育養の形貌を出でずとなす、祖仙之を聞きて大に奮起し、深く山中に入り、其狀を模する事歲あり、遂に逼眞の妙を得るに至ると、世に祖仙の猿と呼びて其名一時に高し、文政四年歿す、彼れの畫く所は猿族を主とするも、別に虎鹿の類をも寫せり、此圖は月夜の郭公を畫きしものにして、此種の題材は彼れの作品としては寧ろ珍とすべきものなるべし。



第四十九　出山釋迦圖　　吳春筆

掛幅　絹本水墨　竪三尺七寸八分　横一尺八寸一分



月溪、松村氏、名は春、字は伯望、通稱を嘉右衛門と云ひ、月溪はその號にして別に允伯或は存白の號あり、京師の人なり、嘗て攝津吳服の里に隱れ、此地に春を迎へたるに因りて自ら吳春と稱せり、夙に諸藝に通じ、尤も畫を巧みにし、又俳句を能くせり、初め大西醉月に從ひて畫法を問ひ、後去つて與謝蕪村に師事し、畫と共に俳諧を學べり、その三菓堂と稱せしは蕪村の號を襲ぎしものなるべし、蕪村の歿後、應擧の畫風を喜び、從ひて學ばんと欲せしも應擧その師となるを固辭し、遂に莫逆の友となれり、是れによりて應擧の畫風の影響を蒙り、遂にその作風を一變して新機軸を出だし、圓山派より出でゝ別に一派を樹立するに至れり、世人之を呼んで四條派と云へり、是れ彼れが居の京洛四條東洞院に在りしに因るなり、文化八年六十歳にして歿す、門下には豐彥、義董、東暉等知名の士多し、弟景文また家兄に學びて名聲あり、此圖は水墨によりて出山釋迦を圖せるものにして、彼れの潔勁なる用筆を見るべく、圖幅には僧宗曄の讃あり、幻弁宗曄は字を曇榮と云ひ、禪月と號し、龜井南溟の弟なり、少にして豐前國崇福寺に投じ、德隱宗薩の法を嗣げり、早く京洛に來り、東福寺にありて諸禪師に參ず、書畫の外、特に善詩を以て知らる、文化十三年六十七歳にして寂せり。



第五十　海濱仙鶴圖　松村景文筆　一雙之一

屏風　金地紙本著色　竪五尺五寸　横一丈二尺三寸六分

景文、松村氏、字は子藻華溪と號す、其本名景文を以て世に知らる、京師の人にして堺町通四條に住せりと云ひ、或は四條富小路西に住せりとも云ふ、呉春の末弟にして家兄に從ひて畫法を討ね、深くその法格を究め、又頗る應擧の旨を得たり、文政天保の頃、豐彥と共に平安の畫宗と稱せられたり、天保十四年歿す、歲六十五、其門下橫山清暉、西山芳園等尤も世に知らる此六曲屏風一雙は彼れの畫く所にして金地に白鶴と波濤とを圖せるもの、賦彩金地に照應して頗る精麗、其構思用筆共に景文の達腕を尤も能く發揮せるものと云ふべし。



第五十一　海濱仙鶴圖　松村景文筆　一雙之一

屏風　金地紙本著色　竪五尺五寸　横一丈二尺三寸六分



第五十二　水川骨白鷺圖　松村景文筆　雙幅之左

雪松泛鴨圖　松村景文筆　雙幅之右

掛幅　絹本著色　各竪三尺三寸四分　橫一尺一寸六分


景文

景文